1970.5.7 明治大学新聞

和泉祭、まもなく

「狙撃の季節」——統一テーマ

29・30・31日 実行委最後の追込みへ

第二〇回目を迎えた〝苦と躍動と思考と感触の初夏の祭典〟『和泉祭』は、今月の二九、三十、三十一日の三日間、和泉のキャンパスで、総予算三〇〇万円、参加団体約八〇サークルによって開催される。このほど、そのプログラムがまとまり、各サークルを通して和泉祭実行委員会（星野貞司委員長＝法二）の手で明らかにされた。

同祭は①昨年十一月、本学の恒例行事だった『駿台祭』が学内状況の緊迫を尊重した関係諸団体によって異例の中止に至る事態をみていること②入構者に対する検門体制は一応緩和されたものの、校舎全体に今なお板塀がはりめぐらされ、昨年提起された学内諸問題をめぐる争いが、未だ解決を見ていない③六月下旬に安保改訂期を控えて当局の一部に緊張が抜け切らない④四月二十三日自治会の主導権をめぐってブンド、MLが衝突し、ブンド系実行委員が内ゲバ事件で逮捕され現在なおも拘留中である。——など幾多の懸案件の中で、一部には開催をあやぶむ声も聞かれていたが、最近になって、「どうにか当局との折り合いもつき、実行委内部にも問題はない」（同実行委談）としており、今年も、和泉ヶ丘に色彩豊かな祭典が繰り広げられることが可能になったものである。

第二〇回目の今回は、『狙撃の季節』〝見知らぬ他者からの狙撃を拒絶せよ〟をメイン・テーマとして行なわれるが、大きな特色としては、従来まで各学部の自治会単位で何らかの催物を行なってきたものを、今回は、法・政・文などの「闘争委員会」ごとに実施する運びになった点があげられる。これについて同実行委としては「これまでの全共闘運動の反映である」と説明している。

さて、第一日目の二十九日の前夜祭は正午から、開会に先がけて校舎付近をデモ行進した後、中庭でマニュフェストが行なわれ、三日間に渡る祭典の幕を開ける。この後、応援団、体育会などの演武が披露され、夕方には、中執・本部などの主催による映画会も予定されている。

また、二日目からは、各サークル単位の催物のほかに学館運営委員会、各闘争委員会などの主催による『シンポジウム』が並行して実施される。そのいくつかを拾ってみると、三十日午前十一時からの学館運営委員会企画は『空間占拠とコミューンの思想』と題して評論家の針生一郎、本学助教授の小野二郎、日大全共闘議長秋田明大らを招いて行なうほか『地区ソビエトへ』（法闘委）、『地区共闘の組織化で安保粉砕へ総進撃を』（政闘委）、『燃えあがるアジア（沖縄—朝鮮—インドシナ）』（文闘委）、『我々の闘いとしての自主ゼミ運動』（経営自主ゼミ実行委）と闘う和泉祭としての色彩が強い。さらに、ベ平連など七団体による特別企画と用意されており、前回以上に講演会の多い和泉祭となりそうだ。また、夕方から夜半にかけては、ロックフェスティバル・ジャズなども加わり花をそえる。

最終日の三十一日には、講演会シンポジウムが前日引き続いて行なわれるほか、夜八時からは安田グラウンドで、祭典のフィナーレを飾って『後夜祭』が行なわれ、ファイヤーストームの炎の消化とともに、三日間にわたる和泉祭の幕を閉じる。

なお、今回の実行委主催の特別企画としては、『苦渋の情況から新たな獲得への前奏を！』と銘をうったシンポジウムを三十、三十一日と行なわれる一方、小川プロ製作の映画三本が上映され、昨年同様、本学OB唐十郎による状況劇場も中庭で公演される。

参加サークル数は、現在までのところ、正式には七八団体と前回より少ないが、実際上は、さらに増えて九〇団体近くにはなるものと同実行委では見ている。

二月ごろから、活動を始めたという同実行委にとっては、これからが最後の追い込みに入るわけで低迷を続けるサークル運動に対する一つの現状打破への突破口を見い出すため、ということもあり今回の『和泉祭』の持つ意義は大きいと言える。